

英国地方史研究文献 (一)

——イースト・ライディング・オヴ・ヨークシアの場合——

越 智 武 臣

【要約】 外国人による外国史研究には、どのような構えと手続きとが、必要なか。このような素朴な疑問を、英国一地方史研究のうえにぶつけてみたものが、本稿である。結果、そこに意外な困難と多様さとを發見し、またこれらを通じて、英国ならびに英国史研究方法なるものを再考させられたことを、筆者はひとつの収穫であつたと、考えている。ふたつには、主として、ディケンズ・マクマホン両氏の手引きにすがりながら、整理し、考えてみたせいぜい上記一地方の文献目録ではあるが、いま書庫の塵埃に光を消した、こうしたベドストリアンな堆積物のなかにも、なんらかの英国地方史研究の一趨向がキャッチできれば幸いである、と思う。わが国の英国史研究に役立てば、なおさら望外のことである。ここで、直接便宜をあたえられたハル大学図書館・ハル市中央図書館・ベヴァリー州立古文書館、その他イースト・ライディング地方史学会のひとびとに深謝したい。

本稿は、筆者がさきに發表した連続報告「英国地方史研究管見——イースト・ライディング・オヴ・ヨークシアの場合」(『西洋史学』第四一、四三、四五、四七各輯)の第三部、「書誌的概観」として本来予定されていたものである。しかし、すでに第二部までになかなかな紙数を費したので、このたび第三部は、表題とともに稿を改めようとしていた矢先、たまたま当誌に移す機会をえたものである。内容とするところは、副題にいう英国一地方の、文献紹介なら

びに解題であるが、意図するところは、前稿との関連において、ここでもまた、これを通じて、どこまでも英国地方史研究の管見に資しうれば、と考えている。そもそも、新しい分野に対する歴史研究の第一歩は、当該分野に対する、既刊文献の知悉と史料の所在を最低限の知識として要求する。最近わが国において、外国史研究のうえでも、地方史研究の必要が叫ばれながら、地道なこの第一歩が、まだ着実にふみだされているとは、不幸にして考えられない。雲煙を

隔てた東と西、南と北の断片史料が、ア・ブリオリな思考のフレームのなかで、かの月並典型的なローマン・ヴィラのモザイクよろしく、つぎ合わされるとすれば、それは地方文献の使用であつても、^{リジョンナル・スタディ}真の地方史研究とはいいがたい。たまたま筆者が置かれることになつた、北部英国僻陬の表記の地方においてさえ、これを既刊文献・史料に限つてみても、その汗牛充棟の様に、実は一瞥せざるをえなかつた。したがつて、これらを網羅できないまでも、ある程度整序し、同学の士の便宜に供することも、それ自体学問の一分野であるといふさやかな自足感が、本稿を独立させた、いつてみればひとつの口実である。と同時に、明敏な読者においては、必ずやこの研究文献の刊行状況のなかにも、興味ある英国地方史研究の一動向をキャッチされるであろうし、なおまた前掲稿に總説した地図・雑記とともども、これらを生んだそのローカル・セッティングにも想いを駆せてもらえんとすれば、筆者はこれを望外の幸いとしなければならぬ。つぎに、いくつかの項目に分つて順次文献の概観を試みよう。

一 一般文献

英国においても、地方史研究文献の整理と研究は、かならずしもまだ十分な域に達している、とはいいがたい。ヨークシア・イース

ト・ライディング地方についても、従来ほとんど信頼するに足る文献目録すら、刊行されてなかつたのが実情である。しかも当該地方は、すでに前掲稿でも指摘したように、英国では新しい地方史研究に先鞭をつけた、この点では数少ない啓蒙的な地方のひとつであつた。他は推して知るべきである。研究の推進主体であるハル大学においても、大学スタッフによるこうした文献目録作成の基礎作業が緒に ついたのは、まづたく近年のことに属する。A. G. Dickens & K. A. MacMahon, *A Guide to Regional Studies on the East Riding of Yorkshire and the City of Hull* (The Department of Adult Education and History, The University of Hull, 1956) などの意味において、劃期的なものであり、まづ冒頭に特記しなければならぬものである。だが、著者みずからの言葉によれば、その急速な需要のため、出版後日ならずしてマウト・オヴ・プリントとなり、現在なお再版をみてない状況である。本稿は多くをこの書物に仰いだ。右と同種のものとしては Wm. Boyyn, *The Yorkshire Library, 1869*; T. Sheppard, *Yorkshire Contribution to Science, 1916*; A. L. Humphrey, *Handbook to County Bibliography of British Municipal History* (Harvard Historical Studies, 1897) などがあつたが、これもいまではほとんど入手困難である。むしろ C. Gross, *Sources and Literature of English History from the*

Earliest Times to about 1485 (2 ed., 1915); C. Read, *Bibliography of British History, Tudor Period*, 1933; G. Davies, *Bibliography of British History, Stuart Period*, 1928; S. Pargellis and D. J. Medley, *Bibliography of British History, The Eighteenth Century 1714-1789*, 1915; J. B. Williams, *Guide to the Printed Materials for English Social and Economic History, 1750-1850* (2 vols., 1926) など。一般国民史びんごの文献目録が、この点に關しては、閉却されてはなかなうのである。なお、手写本史料の目録としては、一八七〇年 W. C. Boulter の編集なるものが、ハル市立中央図書館にあるが、これも遺憾ながら、公刊はされてない。

こぎに、文献目録とともに、地方史研究に必要なのは、研究の役割・文書の種類・所在・文書保管行政などを扱った、一般入門書の類いであるが、これはあながち当地方にだけ關するものではなく、一般に、こぎの諸書が參看されてハコでもあろう。また、地方史研究の理念、役割などについては、中心地に應じて多少の解釈の差異がみられるが、とくにレヌスター学派の立場から、これぞのくたものとして、前稿にすいた言及した H. P. R. Finberg, *The Local Historian and his Theme* (Department of English Local History Occasional Papers, no. 1, 1952); W. G. Hoskins, *Local*

History of England, 1959 など好著なが、E. F. Jacob, *Local History: The Present Position and its Possibilities* (History, N. S., vol. xxxiv, no. 122, 1949) が、表題に對して、簡潔な概観と、研究上の方法的側面を關しては、*Local History Committee of the Historical Association, English Local History Handlist, A Short, Bibliography and List of Sources for the Study of Local History and Antiquities*, 1952 (以下 L. H. H. と略) が、今日でも、最も標準的な必携書とされているが、一方、

W. E. Tate, *The Parish Chest. A Study of the Records of Parochial Administration in England* (1st ed. 1946) が、入門書の白眉であり、永への絶版が嘆かれていたが、限定部数ながら、本年、それぞの第三版の上梓をみた。なおこのほか、R. Douch, *A Handbook of Local History*, Dorset (University of Bristol, Department of Adult Education, 1952); Jace E. Norton, *Guide to the National and Provincial Directories of England and Wales* (Royal Historical Society, 1950); L. J. Redstone and F. W. Steer, *Local Records, their Nature and Care*, 1953; *The Amateur Historian* (一七五二年の雑誌月題を發刊) J. E. Morris and H. Jordan, *An Introduction to the Study of Local History and Antiquities*, 1910; F. J. Weaver, *The Material of*

English History, 1938 など代表的なものである。また、英国歴史協会・社会奉仕国民評議会発刊の「*English History Helps for Students of History and Local History Series*」のなかにも多くの関係項目がある。F. G. Emmison, *New Sources of British History: the Service of a Local Record Office* (History, N. S., vol. xii, nos. 141, 142, and 143, 1955); C. J. Skeel, *Medieval Wills* (History, N. S., x, 1926); J. F. Williams, *The Medieval Will as a Source of Local History* (History Teacher's Miscellany, Sep.-Oct., 1924); B. G. Bouvens, *Wills and their Whereabouts, 1939* など、多岐にわたる特殊にわたるが、これらの諸論文にも多少参照のべきである。これに関連して、わが国の研究者には、容赦なくまた達し難いが、マンレオグラフィーに関しては、差別的に次の諸著がある。しかし、第一には馴れを不可欠とするこの問題について、これらの諸著もたゞなる導入にすぎない、とは専門家の一致した見解である。H. Griève, *Some Examples of English Handwriting, 1949*; do., *More Examples of English Handwriting, 1950* (Essex County Record Office); C. Johnston & H. Jenkinson, *English Court Hand, 1927*.

それでは、これから本論に入つて、当ミッドランズに関する一般文献には、どの様なものがあるかを、見つけようとする。

掲げるものは、もちろん玉石混淆であり、とくにアマチュア歴史家による前世紀の諸著には、今日批判に堪えないものもある。しかし、必ず事実知識の集積において、過去と地方に対する卓越した共感に基づいて、読者と同じき興味を呼ぶものもまたこれらの諸著である。地方史家には必要なメンタルの準備の雰囲気を与えてくれる。G. Poulson, *History and Antiquities of the Seigneurie of Holderness* (2 vols., 1840-41) は、この様な前世紀の地方史文献のなかで、今日最も引用書としてたゞと認められる唯一の著作である。トーマス・ライデン東半部、かの中世以来の大封領セントマーケス諸教区に関する無限の著作である。その例、T. Allen, *A New and Complete History of the County of York* (6 vols., 1828); J. J. Sheahan & T. Whellan, *History and Topography of York and the East Riding of Yorkshire* (1855-56); T. Balmer, *History, Topography and Directory of East Yorkshire, 1892*; T. Baines, *Yorkshire Past and Present* (4 vols., c. 1870-1875, esp. vol. iv); J. S. Fletcher, *A Picturesque History of Yorkshire* (3 vols., 1899-1801); G. Lawton, *Collectio rerum ecclesiasticarum in diocesi Eboracensi. Collections relative to Churches and Chapels within the Dioceses of York and Ripon* (2 vols., 1840, 1842);

Memoirs illustrative of the History and Antiquities of the County and City of York, communicated to the Annual Meeting of the Archaeological Institute of Great Britain... held at York, July, 1846; M. C. F. Morris, Yorkshire Folk-Talk, 1892; J. Nicholson, Folk Lore of East Yorkshire, 1890; do, Gaccons of East Yorkshire, 1887; G. R. Park, Parliamentary Representation of Yorkshire, 1290-1886 (1886); do, The Church Bells of Holderness, 1898; W. Smith, Old Yorkshire (5 vols., 1881-84); T. Thompson, Ocellum Promontorium or Short Observations on the Ancient State of Holderness, 1821-24; W. Wheeler, Some Historic Mansions of Yorkshire and their Associations, 2 vols., 1889; W. White, A Month in Yorkshire, 1858; T. T. Wildridge, Holderness and Hullshire, Historical Gleanings, 1886

この二冊は、一般書として、前世紀の産物である。しかし、今世紀に入つて、これらに批判を加へて、これらに著作が減少した。次に、Hull and the East Riding of Yorkshire, 1922; A Guide to the History of the East Riding of Yorkshire (Local History Committee, University College of Hull, 1939); L. Ambler, The Old Halls and Manor Houses of Yorkshire, 1913; J. L. Brockbank,

The East Riding of Yorkshire, 1913; H. B. Brown, The Story of the East Riding of Yorkshire, 1912; A. N. Cooper, The Curiosities of East Yorkshire, 1924; A. G. Dickens, The East Riding of Yorkshire, 1955; J. Fairfax-Blakeborough, Yorkshire, East Riding, 1951; T. M. Fallow, Memorials of Old Yorkshire, 1909; Mrs. Gutch ed, County Folk Lore, iv, East Riding of Yorkshire (Folk Lore Society, 1912); J.E. Morris, The East Riding of Yorkshire (The Little Guides, 3rd revised ed., 1932); do, Yorkshire Reminiscence, 1922; T. Stainforth, Rambles around Hull, 1948 などがある。また、これらに、この地方に興味を持つ、多くは地方人である有名無名の地方史家の名前と、その心の在りかを知ることがある。その関心の内容と変化については、前稿でも述べた。この関心の内容と変化については、前世紀からの偉大な地方史学雑誌 Yorkshire Archaeological Journal (以下 Y. A. J. と略す) や、East Yorkshire Local History Series (以下 E. Y. L. H. S. と略す) Transactions of the East Riding Antiquarian Society (以下 T. E. R. A. S. と略す) Transactions of the Georgian Society for East Yorkshire (以下 T. G. S. E. Y. と略す) Hull Museum Publications (以下 H. M. P. と略す) など、これら、その歴史や、その歴史を、York-

shire Notes and Queries (1885-1890) 〃 Yorkshire Genealogist (1885-1890) 〃 Yorkshire Bibliographer (1888) 〃 Yorkshire Folklore (1888) Yorkshire County Magazine (1891-1894) 〃 Northern Genealogist (1895-1902) など各公刊を刊誌したのほ、ルベリなど多彩な執筆陣と地方に対する関心の存在をみた。なか、一般文藝ムーブ、ムリソ Associated Architectural Societies Reports and Papers 〃 Yorkshire Parish Register Society の刊行物、ムリソ曼録の Victoria County History of Yorkshire (ズレ V. C. H. Yorks. ヲ書) など十冊を刊行し、註めたるムリソ也。

英国地方史研究が、キチマキムリソ、一かゝる發達したムリソムリソ、このことも前述したが、ムリソムリソ広義の地誌——地産・地質、それに関連ある農業・自然史等とむくむく、これが歴史生成の一般的ムリソトを提示したムリソ也。興味士ムリソのムリソをあげ、キチ地産・地質に關つた、ボトホキ、ムリソのムリソ、本誌のムリソ著者が著る。 E. M. Cole, Notes on the Geology of the Hull, Barnsley and West Riding Junction Railway and Dock, 1886; J. R. Dakys and C. Fox-Strangways, The Geology of Bridlington Bay (Memoirs of the Geological Survey, 1885); G. de Boer, A System of Glacier Lakes in the Yorkshire Wolds (Proceedings of the Yorkshire Geological Society, xxv, 1944);

do, The District around Hull: its Geographic Physique, 1951; B. Hobson, East Riding of Yorkshire (Cambridge County Geographies, 1924); S. Melmore, Glacial Geology of Holderness and the Vale of York, 1935; J. Phillips, The Rivers, Mountains and Sea Coast of Yorkshire, 1855; do., Illustrations of Geology of Yorkshire, 3 rd ed., 1875; F. R. C. Reed, The Geological History of the Rivers of East Yorkshire, 1901; do., The Geology of Holderness (Memoirs of the Geological Survey, 1885); T. Sheppard, The Making of East Yorkshire, 1906; do., The Lost Towns of the Yorkshire Coast, 1912; do., Geological Rambles in East Yorkshire, 1903; do., East Yorkshire History in Plan and Chart (T. E. R. A. S., xix); W. Smith, Ancient Springs and Streams of the East Riding, 1923; V. Wilson, British Regional Geology: East Yorkshire and Lincolnshire (Geological Survey and Museum Publications, 1948); P. F. Kendall & E. H. Wroot, Geology of Yorkshire, 2 vols, 1924; R. Boyle, The Lost Towns of the Humber, 1889 (本誌のムリソ也。 編輯 T. Sheppard 著 ヲ書せし編著) 〃 ヲリソムリソ ヲ書せし編著 〃 ヲ書せし H. C. Darby, Historical Geography of England before 1800 (1948); L. D. Stamp, Britain's Structure and

Scenery, 1946 など、全国的な地理的叙述との関連のもとに読まなければならないのはいうまでもない。また、古地図については、ハル市中央図書館が、ぼう大なコレクションのリストをもつてゐるが、差当つては、Y. A. S. Record Series Lxxxvi に「一五七七」年より一九〇〇年にいたる古地図のリストが見られる。

農業が、地理的制約に左右されていることは、今も昔も変わりがない。試みに当ライディングにおいても、殖土質のホルダーネスとチヨーク質のウォールト地方とは、じまなお農業景観が違って、こたがつてまた人事の歴史において、明らかな差異を呈するが、時代を遡れば遡るほど、その変化は著しかったものと思われる。いわば、それを知ることは、地方史生成のひとつの場を知ることである。この地質と農業史との関連についてのめづりごとくマイタルな労作は、*著者* S. E. J. Best, East Yorkshire, A Study in Agricultural Geography, 1930 二指を屈しなればならぬ。これはその後 L. D. Stamp, The Land of Britain, The Report of the Land Utilization Survey of Britain, pt. 48, Yorkshire East Riding, 1942 によつて補補されたが、まづこの二書は当該地方における農業史研究の必携書としてゐる。Alan Harris, Pre-enclosure Agricultural Systems in the East Riding (London M. A. thesis) は、ハル大学地理学科のスタッフとして、当然ながらそんだんに地

方文書と地図を使った精密を極めたもの。O. E. Wilkinson, The Agricultural Revolution in the East Riding (E. Y. L. H. Series, no. 5, 1956) と併用するべきものではない。しかし一般に十七世紀までの農業史に関しては、文献は少ない。チキードー・ヘンタローンがその他に関し、まづ次の研究を挙げておこう。M. W. Beresford, The Lost Villages of England, 1954; do., Y. A. J. xxxvii, xxxviii; M. W. Barley, East Yorkshire Manorial By-laws (Y. A. J. xxxv); do., Old Farming Methods in East Yorkshire (H. M. P., no. 132); J. S. Purvis, Y. A. J., xxxvi; Michael Drayton, Poly-Olbion (1613, ed., J. W. Hobel, 1933)。なほ、十七世紀ライディングが誇りうる古典的農書 The Farming Book of Henry Best of Elmswell, ed. C. B. Norcliffe (Surtees Soc., xxxiii) によつては、前掲稿の記述と写真を参照願えれば幸ぶである。その上で、十七世紀までは、このケンリー・システムを唯一の例外として、断片的な荘園史料によつた現在の微々たる研究があつても、同時代史料としての農書は、絶無に近かつた。それが、十八世紀、この地方に対する改良農業の導入とともに、俄然その数を増すのである。おそろへ、その史料状況からいつても、今後の研究は、むしろこの時代に注がなければならない。われわれには不可能でもあり、また意味がない、とを

題である。次の二本の書籍が有名である。G. Legard, Prize Report on the Farming of the East Riding of Yorkshire (Journal of the Royal Agricultural Society, ix, 1849); W. Marshall, The Rural Economy of Yorkshire (2 vols, eds. 1788, 1789); I. Leetham, General View of the Agriculture of Yorkshire: East Riding, 1794; G. A. Cooke, Topographical and Statistical Description of the County of York, c1812; Daniel Defoe, A Tour thro' the Whole Island of Great Britain, 3 vols., 1724-27; H. E. Strickland, Agriculture of the East Riding of Yorkshire, 1812; C. Howard, General View of the Agriculture of the East Riding of Yorkshire, 1835; W. Wright, Improvements of the Farming of Yorkshire, 1862; Arthur Young, A Six Months' Tour through the North of England, 4 vols., 1770; P. Churley, The Yorkshire Crop Returns of 1801 (Yorkshire Bulletin of Economic and Social Research, vol. v, no. 2); Extracts from the Minutes of the Holderness Agricultural Society from the Foundation of the Society in 1795 up to the year 1850(1853)。これらの一連の史料に対して、現在の研究が上掲の・D・J・ヤーマンのものだけだとすれば、その数はまだごく少くない。M. C. F. Morris, The British Work-

man, Past and Present, 1928; Mary Simpson, Annals of an Evening School in a Yorkshire Village, 1861 年、ウィリアム・ヤーマンが農業労働事情を扱ったもの。前者はナンマン村、William Blades の伝記であり、後者はナンマン村近隣の農村労働者教育についての興味ある話題を伝えている。しかし、なんといつてこの時代の農業史研究として不可欠なのは、かの Enclosure Awards であるが、そのほう大な文書・地図類も、いまはまだマンリー・ノート・ホフマンの書庫に眠りたままである。最後に、自然史ナチュラリスティクスに関しては、これも挙げられぬが、差当りしては V. C. H. Yorks.; J. F. Robinson, The Flora of the East Riding of Yorkshire, 1902; W. E. Clark & F. Boyes, The Birds of Yorkshire, 2 vols, 1907 などを探検するに足る。

なお、一般文献の紹介に関連して、こゝで当該ライティングの地方研究機関・史料所在地等についても簡単に言及しておくと、必要かと思われる。自明のごとながら、一般に地方文書が、その地方においてのみ見られる、という保証はない。また対象テーマの時代別史料が、各種文書のなかに分散して存在していることについても、言を要しない。つまり、史料の時間的・空間的な分散は、ほとんど無限に近づくとつてよいのである。文書を扱いたれた史家には、自明なこのようなことがらも、主としてセカンド・ハンドな集輯史

料にのみしか頼らざるをえないわが国の西洋史家にとっては、それほど深刻には考えられてないように思う。そこから帰結するものは、問題意識さえあれば直ちに歴史が書けると思う錯覚、でないまでも両者の上すべりな混合なのである。試みに思え。いま問題の村落史をとりあげてみても、たとえば Cottingham というハル市近郊の一古村の史料は、前稿にあげたヘヴァリー古文書館所蔵の文書に限つただけでも、幾組の家族文書のなかに分散していたことか。さらにまた、当村がノルマン征服後は Stuteville 家の所領であつたとすれば、われわれは、ここでまたそのチャーターを求めて、ロンドンあるいはオックスフォードへと、その足を伸ばさなければならぬのである。歴史学の方法とは、別に面倒な理窟ではない。だが、より至難なのは、おそらく何年かを要するこのような渉獵と整理とである。したがつて、頗る不十分なことを意識しながら、盲目的な蛮勇ではなく、着実な外国地方史研究の道程の一助にもと、この稿を書きつけている。このような観点から、当ライディング研究にとつても、無視しえない巨大な中央研究機関と史料の所在地は、いままでなへ、Public Record Office、British Museum、Bodleian Library、Oxford の三者であらう。とくに、第三番目のものは、多くの Yorkshire MSS. を含んでゐる、とらわれてゐる。前三者について、V. C. Galbraith, An Introduction to the Use of the

Public Records, 1953; Guide to the Public Records, Part I: Introductory (H. M. S. O., 1949); M. S. Guisepi, Guide to Archives relating to Surrey in the Public Record Office (Surrey Record Office, xxiv, 1926); British Museum: the Catalogue of the Manuscript Collections, 1951; J. P. Gilson, A Student's Guide to the MSS. of the British Museum (Helps for Students of History, no. 31) などが、適当な案内を提供してゐることから、すでに研究者には周知のことと属する。つきに、地方に帰つて、まず第一に挙げるべきは、ハル市中央図書館内 Reference Library であらう。一般に、地方史研究の便宜が、市立図書館において提供されることは、他市においても同様であるが、いま地方史文献の蒐集は、地方史家ロウソン氏のもとに、ほとんど完全な整理をみつゝある。第二にくるものは、おそらくハル大学図書館であり、ここにもまたハル市を中心とするヨークシア関係文献、とくに Hull Trinity House の MSS. が購置されて、今後一段の整備が期待されてゐる。ほゞ大なハル市文書は、いま Record Clerk, Town Clerk's Department の保管のもとにあるが、これを所蔵するのは、いままでなへ Guildhall である。これについては、ハル市文書を紹介するとき、追つて言及されることであらう。ヘヴァリー古文書館所蔵文書については、あつては、あつては、このほか、

ヴァーリー、ブリドリントン、ヨークなどの Public Library があり、ベヴァリー、ヨークについては、その Guildhall が、これまたその古都に似合わしく、当ライディング関係の文書に富んでいる。最後に、ヨーク大主教管区文書については、その重要性を認めて、すでにライディング史研究の域をこえるものであるが、その主管者であり、すぐれた地方史家兼エタレンオロジスト Dr J. S. Purvis の名をとって、Borthwick Institute, St. Anthony's Hall の名を逸すことはできなう。

① とくにノーフォーク州については、米川伸二氏のすぐれた紹介があることを、われわれは見逃してしまわねばならぬ(『一橋論叢』三九の六、四〇の六、参照)。また全般的な文献紹介については、小松芳喬「地方史研究とイギリス経済史学」(『社会科学討究』第八号)。

② 十九世紀以前のものとして、多少とも当地方に関係あるものは、地方史創草期の以下の著作である。W. Camden, *Britannia*, 1586; J. Speed, *Theatre of the Empire of Great Britain*, 1611; T. Cox, *Magna Britannia*, 1720-1731。

③ 拙稿「イギリス地方史研究管見」(『西洋史学』四七)。

④ 現在 V.C.H. Yorks. の「East Riding」関係はまた公開されてならぬ。地方委員会のつくられたのは一九五五年、表題は *Victoria History of the East Riding of Yorkshire and the Cities of York and Hull* である。 Cf. *Instit. of Hist. Research*, 33 Annual Report, 1955。

二 古代・中世史文献

現在では、国民史の主流からおき置かれたようなライディンぐも、古代・中世においては、英国形成史のうえで重要な役割を果たした。また、そのサウンズな知識は、R. G. Collingwood and J. N. L. Myers, *Roman Britain and the English Settlements* (2nd ed. 1937); F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England*, 1947 など(『Oxford History of England』)の得られるはずである。

なおつねに関連して、I. A. Richmond, *Roman Britain* (*Pelican History of England*, 1955); R. H. Hodgkin, *History of Anglo-Saxons*, 2 vols., 3rd ed., 1952; E. T. Leeds, *Archaeology of the Anglo-Saxon Settlements*, 1913 などが、それぞれ、国民史的なレベルから、第一級の知識を提供している。ローレー・アングロ・サクソン時代を通じて、考古学界に果たしたライディングの地位は、その役割に比例して重要である。これらについては、どうしてもなく現在では V. C. H. Yorks. の「East Riding」も詳細であるが、また、それと「J. R. Mortimer, *Forty Years Researches in British and Saxon Burial Mounds*, 1905 が、主として当地方考古学の間接的「英雄時代」をテーマとしている。このローカル・マンの名は、この市 Mortimer Museum の名をとって、永久に記憶されるであ

らうして、発掘品の一部は、British Museum の陳列品のなかにも見られた。現在サー・トニー・ロビンソン^{*}の編集した H. M. P., no. 162 にあつて引用がある。これはその前期ローマ時代の発掘について、Roman Malton and District Committee Reports, nos. 3, 4 and 6; E. F. Pearson, Roman Yorkshire, 1936; M. Kitson-Clark, Gazetteer of Roman Remains in Yorkshire (四

と Reports no. 5); P. Corder, Excavations at the Roman Fort of Brough on Humber (Hull University College Local History Committee & E. R. A. S., 1934, 1935, 1936, 1937, 1938)

などの報告があるが、すべて最後のもので Brough on Humber の発掘は、近年考古学界の一大収穫であり、これはたゞ、永く地方史家と懸案となつて来た ノーメンタス^{*} の位置を Peltaria の位置も確定されたのである。なお P. Corder, Excavations at Brough (T. E. R. A. S., xxviii); Journal of British Archaeological Association, 3rd series 第四号の発掘経過を扱つたもの。その他 P. Corder, Excavation at Emswell, East Yorkshire, 1938 (1940); T. Sheppard, Excavation at Eastburn, East Yorkshire (Y. A. J., xxxiv) などの前掲のよきな Rudston のローマン・ストーンに關しては、よき Y. A. J., xxxi, xxxii, xxxiii に報告がある。Eboracum のブリローヤン・モーンの「プロミン」は

つては、現在めいごの權威あるものとされてつるのには、Yorkshire Architectural and York Archaeological Society 発行の A Short Guide to Roman York, 1956 がある。またローマン・トリチン末期、本地方がひんがしの舞台となつた有名な "Saxon Shore" の発掘問題については、Edward Stenton, Pearson, Kitson-Clark によつて述べられている。

ノントロ・サタン^{*}をよびつれた続ヘン人の定着状況については、上掲書のほか、なかなかすべ次の諸論者が参照されるべきである。J. N. L. Myers, The Teutonic Settlement of Northern England (History, xx, Dec., 1935); J. R. Boyle, The Danes in the East Riding, 1895; W. G. Collingwood, Anglian and Anglo-Danish Settlement in the East Riding (Y. A. J., xxi)。これは前掲のよきをよびつたノントロ・サタン^{*}の史上著名なノントロ・ノットンの戦つてつては、E. A. Freeman の史書 The Norman Conquest, iv の註釈や註文、A. D. H. Leadam, The Battle of Stamford Bridge (Y. A. J. xi); do, Battles Fought in Yorkshire, 1891; A. H. Burne, More Battlefields in England, 1952; F. W. Brooks, The Battle of Stamford Bridge (E. Y. L. H. S., 1956) などにあつて、地方史家のあつたごき、関心の深さが示されてつる。最近の定住史研究上、とくに脚光を浴

ひた地名学的研究の中心は A. H. Smith, *The Place Names of the East Riding of Yorkshire and York* (English Place Name Society, xiv, 1937) が唯一の權威的な著作である。また定住史と無関係ではなから美術・貨幣史関係の文獻の中心は G. Baldwin Brown, *The Arts in Early England* (revised ed. 7 vols., 1926-37); A. W. Clapham, *English Romanesque Architecture*, vol. 1, 1930; G. C. Brooke, *English Coins from the Seventh Century to the Present Day*, 1950 美術雑誌の編集に力を入れている。

* Hull Museum Publications のなかで、前掲歴史学の 24 nos. 4, 47, 70, 122, 169, 209, 211, 213 (近世ローマ史) 23, 135, 170, 182, 183, 189, 194, 206 (近世ローマ史) 66, 67, 97, 117, 134, 195, 208 (近世ローマ史) である。

ノルマン征服後のイングランド東部諸島の歴史は、その時代の革命を意味した。かへして初期にはその歴史は、文書群・研究文献の中心ではなかつた。われわれがその中心を離れて基礎の上に立っている。ノルマン征服後の一般的な叙述の中心は、政治・社会経済・教会史である。* V. C. H. Yorks. 24 のなかで、現代 Patent Rolls, Close Rolls, Fine Rolls, Inquisitions Post Mortem, Papal Registers など、Y. T. H. 11 のなかで、その法源をたぐり、* Y. A. S. Record

Series が、もう大なる地方文書を続刊してあげようを特記した。* 中世史関係の中心は、そのなかで、次のようなものが、Y. A. S. Rec. Ser. no. xii (Yorkshire Inquisitions I), no. xvii (Lay Subsidies 25 Ed. I), no. xvii (Monastic Notes I), no. xxi (Lay Subsidies 30 Ed. I), no. xxii (Yorkshire Inquisitions II), no. xxxi (Yorkshire Inquisitions III), no. xxxvii (Yorkshire Inquisitions IV), no. xxxviii (Wills etc. from the Dean and Chapter Court), no. xxxix (Yorkshire Deeds), no. xlii (Yorkshire Fines 1327-1347), no. xliii (Yorkshire Assize Rolls), no. 1 (Yorkshire Deeds), no. lii (Yorkshire Fines 1437-1377), no. lix (Yorkshire Inquisitions), no. lxii (Yorkshire Fines 1218-1231), no. lxiii (Yorkshire Deeds III), no. lxiv (Early Yorkshire Woolen Trade), no. lxvii (Yorkshire Fines 1232-1246), no. lxix (Yorkshire Deeds V), no. lxxx (Miscellanea), no. lxxxii (Yorkshire Fines 1246-72), no. lxxxiii (Yorkshire Deeds VII), no. c (Yorkshire Sessions of the Peace), no. cii (Yorkshire Deeds VIII), no. cxi (Yorkshire Deeds IX), no. cxx (Yorkshire Deeds) である。ノルマン史の主要な文献『エドワード・トーマ』は、Record Commission 編 Liber Censualis vocatus Domesday Book (1783-1816) だ。

うまなお標準的なものであつた。一八六二年には、モートンに關する分の写真版により、Ordnance Survey Office から公刊された。これは、翻訳は二種類あり、この後 Y. C. H. Yorks. ii の R. W. Farrer の周知の著者の著、R. H. Skaff の著、Y. A. J., xiii, xiv (一八九六年再版) がなされた。また、新トウキョウのみに關しては、ロンドン図書館本 A. B. Wilson-Barkworth, Domesday for the East Riding of Yorkshire, excepting the lands in Holderness, arranged under places and not under tenants in capite, 1625; do., The Composition of the Saxon Hundred in which Hull and neighbourhood were situated as it was in its original condition を著し、研究として T. A. M. Bishop, The Norman Settlement of Yorkshire (Studies Presented to... F. M. Powicke, 1948) を著す。また、当地方の研究著者の中には、中世初期に關しては Early Yorkshire Charters, 10 vols. (ed. W. Farrer and C. T. Clay) を、中期については Kirby's Inquest (Surtees Society Series, xliii) を、後期については Yorkshire Sessions of the Peace (ed. Putnam, Y. A. S. Rec. Ser. c) を、ネズムクエの歴史については、直接これらの史料の背景をなす歴史記述については William Newburgh, Chronicles of the Reigns

of Stephen, Henry II and Richard I, vol. i and ii, Rolls Series 1884-85 があり、また、今は跡かたもなからぬ修道院の Chronica Monasterii de Melis, 3 vols., Rolls Series, 1866-68 がある。モートンに關する中世年代記の代表作は、その前編に著した著者の著、Historians of the Church of York, 3 vols., Rolls Series, 1879-94 である。当然のことながら、当地方に關する記述が見られる。

また、特許研究として N. Denholm-Young, Seigniorial Administration, 1937; do., The Yorkshire Estate of Isabella de Fortibus, Y. A. J., xxxxi の著、P. Saltmarsh, East Riding Levies for the Scotch Wars in the Reigns of Edward II and III with Remarks in the Feudal System (T. E. R. A. S., xix); do., Local History from the Holderness Poll Tax Roll (T. E. R. A. S., xxvii) などがあり、地方史研究の新しい方向を告げている。後述については W. Brown, Holderness Wills (ibid., x, xi); J. C. Cox, A Poll Tax Roll of the East Riding (ibid., xv) などの史料を提供するであろう。

都市關係の文獻については、元來当ライディングにおおつては、ルン、ハムリー、ロマンをのぞき、都市と呼ばれるべきものはなかりだ。モートンには、その間に、ライディング史の範圍からば

除外すべきものだ)。ノルマンヴィー両市の文書として、その
 ずれ節を改め、紹介する。その中で、ノルマン史関係
 のものだけでなく、そのほか、その中で、ノルマン史関係
 著作 J. R. Boyle, *The Early History of the Town and Port of*
Hedon, 1895. が依然古典的な地位を保っている。しかし、同時に
 これは近代ノルマン史を扱った。G. R. Park, *History of the*
Ancient Borough of Hedon, 1895. により補充されるべきである。この
 基礎となった Park MSS. は、現在ノルマン中央図書館がこれを保存
 している。最近では、*British Numismatic Journal*, xxvi, 1949) など
 Norman Mint (British Numismatic Journal, xxvi, 1949) なる
 り、また、ノルマン時代のそれと並んで、ホルダーネスに著名な教
 会聖オーガスタインのことが、E. M. Ainslie, *The Church of*
St. Augustin, Hedon; J. W. Wake, *Sketch of St. Augustin*
Church, 1847. がある。

最後に、中世史に大きな分野を占めた教会史関係の文献史料とし
 ては、どうであるか。当ノルマンの社会史でも、重要な光
 をなげかける史料は、もちろんオックスフォードの先述した教
 会史料の宝庫、モートン在 Borthwick Institute を訪ねなければな
 らない。それはともかく、A. Thompson Hamilton, *The English*

Clergy and their Organization in the Later Middle Ages, 1947;
 K. Edwards, *English Secular Cathedrals in the Middle Ages*,
 1949; R. A. R. Hartridge, *Vicarage in the Middle Ages*, 1930
 などの書物が、その全般の概況についての好個の導入書として種
 々なりである。地方史として、*差支*のつなぐ A. Thompson
 Hamilton の著である V. C. H. Yorks. vol. iii. は、*差支*のつなぐ
 Borthwick Institute 収蔵文書のなかから、次のものが公刊されて
 いる。Register of Thomas Corbridge (Surtees Soc., cxxxviii,
 cxli); Register of Walter Gifford (Surtees Soc., cix); Register
 of Walter Gray (Surtees Soc., lvi); Register of William Green-
 field (Surtees Soc., cxlv, cxlix, cli, clii, cliii); Register of
 William Wichwane (Surtees Soc., cxiv); Documents from...
 the Registers of Henry Bowet and John Kempe (Surtees Soc.,
 cxxvii)。また、*差支*のつなぐ A. Thompson
 Hamilton, *The Registers of the Archbishops of York* (Y. A.
 J., xxxii); E. F. Jacob, *The Registers of Canterbury and York*
 (St. Anthony's Hall Publications, no. 4); R. L. Fowler, *Episco-
 pal Registers of England and Wales (Helps for Students of*
History, no. 1, 1918) 上巻 A. H. Thompson Hamilton, *The*
English Clergy などが研究資料として必要なのである。このほか、

地方史に關係ある教会史關係著作をとりあげれば、Historians of the Church of York (Rolls Series) ; Taxatio ecclesiastica Angliae et Walliae auctoritate Nicolai IV (ed. R. Ayscough and J. Cayley, Record Commission, 1802) ; Memorials of Beverley Minister : the Chapter Act Book of the Collegiate Church of St. John of Beverley, 1286-1347 (Surtrees Society, xviii, cviii) ; W. H. Dixon and J. Rain, Fasti Eboracenses, 1863 ; A. A. R. Gill, The Archdeacons of the Diocese of York, 1915 ; do., Archdeacons of the East Riding (T. E. R. A. S., xxi) の二書がその代表である。

イースト・ライディングを含むヨークシムは、中世修道院生活において、他に比類をみない繁栄を見たところである。ヨーク・聖メアリー、セルビー、ウイットビー諸修道院の名を想起するだけでも英国メネディクト派修道院生活に占める、その隠然たる勢力をうかがうことができる。しかし、それよりも優るものは、これまた人口に膾炙したフアウンテン、ジェルウォー、シュー、リーウォー、ヒランド等々を結んで、巨大なグループを形成したシトラー派修道院の勢力であり、聖界に占めるヨークの位置とあてまつして、この宗教生活における空然の深淵をたたえたのである。十六世紀修道院解散とともに、かの「恩寵の巡礼」が、まさしくこの地に荒れ狂つた

のも、またいまは荒涼たる遺跡を、寒風のなかにならすのをみるゝき、なほはともあれ、地方史家の心が、その回想に赴くのも、決して偶然とはなごたうべきである。以上あげた巨大修道院のことが、デント・キングに關するものや、やあどつた Chronica Monasterii de Melsa 3 vols., Rolls Series をのりつたマナー修道院の歴史、バグダッドの修道院史のつづき、J. C. Cox, The Annals of the Abbey of Meaux (T. E. R. A. S., I) の地方史學全體の巻頭を飾つて居るや、T. Sheppard, Meaux Abbey (T. E. R. A. S., xxvi) は、その遺跡發掘を扱つた『年代記』と題した歴史小説、A. Earle, Essays upon the History of Meaux Abbey, 1906 の著作がその代表である。その他、Watton, Water, Haltemprice, Bridlington など、群小修道院を扱つたものもつづき、T. E. R. A. S., viii ; Y. A. J., xxxi ; Journal of the Bridlington Augustinian Society, no. 2 所載の W. H. St. John Hope ; N. Denholm-young ; J. C. Cox ; J. S. Purvis の諸論文がみられる。なお、キールマンのつづき、Rose Graham, St. Gilbert of Sempringham and Gilbertine Order 1901 ; do., English Ecclesiastical Statutes, 1929 があつたが、前掲のつづき、Kirkham のつづきは、遺憾ながら研究がない。しかし、このようなライオン・閣の修道院史も、全体的な修道院運動史を無視するときは、その歴

史的な意味の大半を失なう。その観点からついでに、この点で周知の D. Knowles, *The Monastic Order in England*, 1940; do, *The Religious Orders in England*, 1950 の二大著のほか G. Lowton, *The Religious Houses in Yorkshire*, 1853; F. A. Mallin, *A History of the Work of the Cistercians in Yorkshire*, 1932; J. S. Fletcher, *The Cistercians in Yorkshire*, 1919 を挙げておこう。

な、まだびびりなかな。また史料として Y. A. S. Rec. Ser., nos. xlviii (Suppression of Monasteries), lxxxii (Monastic Notes II), lxxxviii (Monastic Chancery Proceedings); W. Dugdale, *Monasticon Anglicanum*, 1817-1830; T. Tanner, *Notitia Monastica*, 1744; J. Burton, *Monasticon Eboracense*, 1758; D. Wilkins, *Concilia Magnae Britanniae et Hiberniae*, 1731; E. Gilson, *Codex Juris Ecclesiasticae Anglicani*, 1761; *The Canon Law of the Church of England* (S. P. C. K., 1947) など一般に考慮すべきである。興味ある中世建築史などはついでに、地方史研究のひとりのジャンネではあるが、この点は省略するにしよう。

三 テューダー・ステュアート史文献

テューダー・ステュアート絶対王政の到来とともに、北部、わけでもこのヨークシアの東南隅は、次第に国民史の主流からはずされ

た存在に転落してゆく。しかし、英国最大の州ヨークシアの潜勢力は、一度はさめゆる「北部の問題」として、かの絶対王政成立期に、いま一度は、市民革命の一拠点として、その解体期に、深刻にその存在を南部人の脳裡に叩きこんだのである。近代国家統一期における、この半独立の辺境地帯が演じた役割は、まさにこの二つの事件を中心として、地方史家の研究に結節している、といつてよ。

第一の問題は、具体的には、宗教改革・修道院解散・恩寵の巡礼・北部地方裁判所の成立に絞られる線であるが、当地方はこれに對して、まず第一級の史料と研究を提出しよう。R. R. Reid, *The King's Council in the North*, 1921 は、この局面をさめるともウマイタルな業績。一般に、北部の後進性を誇張した非は免れない、といわれているが、当ライデンンにおける、この期の社会・経済・行政等々につき教示するところが多。ロバート・フスタの想い出とともに、当地にひとりの根拠をのこした「恩寵の巡礼」といって、リードの前掲書 (pp. 121 seq.) と並べ、M. H. and R. Dodds, *The Pilgrimage of Grace and the Exeter Conspiracy*, 2 vols., 1915 が挙げられよう。ただし、後者は、史料的には、まだ主として公刊公文書 *Letters and Papers of Henry VIII* のみ扱ったきらいがあり、その意味で地方史料の利用に憾みなしとしない。このような欠陥を補いつつ、これら二つの業績を越えて、こ

の方面では、現在新しい地方史研究が実を結ぼうとしている。そして、その功績は、もつぱら、この地方とともて生きたハル大学史学科の二人のスタッフに帰せなければならぬ。筆者自身幸うにも接する機会をえた、A・G・ディマンス教授およびH・W・ブナムス氏がなされた、F. W. Brooks, *The Council of the North* (Historical Association, 1953); do, *York and the Council of the North* (St. Anthony's Hall Publication, no. 5) は、よく小著ながら、この造詣深い老地方史家の好篇である。また、「恩寵の巡礼」で終へ宗教運動史をこつては、とへて前者の多様な活動を度外視しては、あはせマンマレンタ史を語らうべきである。すなはち、A. G. Dickens, *New Records of the Pilgrimage of Grace* (Y. A. J., xxxiii); do, *Royal Pardons for the Pilgrimage of Grace* (ibid.); do, *Some Popular Reactions to the Edwardian Reformation* (ibid., xxxiv); do, *Sedition and Conspiracy in Yorkshire during the Later Years of Henry VIII* (ibid.); do, *Robert Holgate, Archbishop of York and President of the King's Council of the North* (St. Anthony's Publications, no. 8); do, *The Marian Reaction in the Diocese of York* (ibid.); do, *The First Stages of the Romanist Recusancy in Yorkshire, 1550-1660* (Y. A. J., xxxv) などがある。主筆として、^① 昨年度

は、これを母胎として、Lollards and Protestants in the Diocese of York, 1509-1558 (University of Hull Publications, O. U. P.) をよむ Thomas Cromwell and the English Reformation (Teach Yourself History) の二著作が公刊されたことを付記し、^② 今度、その系列の著作として、J. C. Cox, *William Stapleton and the Pilgrimage of Grace* (T. E. R. A. S., x); W. H. Frere, *The Marian Reaction, 1896* があり、また宗教改革期のミート大主教管区の政策をよむ文献史料として、W. H. Frere and W. M. Kennedy, *Visitation Articles and Inquisitions of the Period of the Reformation* (3 vols, Alcuin Club Collections, xiv-xvi); F. O. White, *Lives of the Elizabethan Bishops of the Anglican Church, 1898*; *The History of the Lives and Acts of the most reverend father in God, Edmund Grindal, 1821* など、この被 Remains (Parker Society, 1843) などが重要である。修道院解散を機とした社会経済の姿貌^③ として、一般にわが国では興味があるはずである。この第一等史料は、このよむ周知の *Valor Ecclesiasticus* (ed. J. Caley and J. Hunter, Record Commission, 6 vols., 1810-34) である。マートン関係の *Records of the Dissolution of the Monasteries* (ed. A. Savin, English Monasteries on the Eve of the Dissolution, 1909) が、現在、

ども、この史料に対する最上の入門書たるを失わないが、*ノース・イディン*の史関係については、なお以下のような重要史料が指摘せられてゐる。J. W. Clay ed, *Yorkshire Monasteries Suppression Papers* (Y. A. S. Rer., xiviii); J. S. Purvis ed, *Monastic Rentals and Dissolution Papers* (ibid., lxxx); do, *Tudor Parish Documents of the Diocese of York, 1548; Yorkshire Charity Surveys* (Surtees Soc., xci, xcii. ただし、*ノール・ハヴ*を除いて、*当ライオンズ*については「不完全」); *Inventories of Church Goods* (ibid., xcvi). また、*遺言書*が、最近の地方史研究のうえに、新史料として見直されてゐることについては、すでに多くの地方史家が強調してゐるところであるが、とくにヨーク大主教座を控えるこの地方にあつては、*同地の Probate Registry と Diocesan Registry*に、*ぼう大なコレクションが存在する*。*テューダー・イースト・ライディング関係の遺言書*については、*なかならずサートイーズ協会*刊行の *Testamenta Eboracensia* 六巻の *Horth Country Wills* (Surtees Soc., cxvi, cxxi) が代表的なものである。

最後に、*当地方に関係する史料のうち*、Y. A. S., Rec. Ser. 所収 *史料のナンバー*だけをあげておこう。Nos. iii, vi, vii, viii, xi, xiv, xix, xxii, xxiv, xxxviii, xli, xlv, xviii, li, lxx, lxxx, cxiv。この *Star Chamber Proceedings* (同上史料 xlv, li, lxx) につ

いては、*なお* F. W. Brooks, *Yorkshire and Star Chamber* (E. Y. L. H. S., no. 4, 1954) の業績がある。

ついで、この時代の地方史研究のうち、*第二の焦点をなすものは*、*いわゆるピューリタン革命の研究である*。しかし、これは正確には「*焦点をなすべき*」と、*いいかえた方が適當であるかも知れない*。一六四二年春、*いまは当時の木版画によつてしか彷彿できない*、*ハル市*のヴァリー門上に、*革命はその最初の火の手を挙げた*。また、*この革命を回想すべき場所の、当市周辺に多いことは、すでに前稿にも素描したとおりであるが、研究はそれにひきかえ、ほとんど未着手であるのが、不思議である*。ここらあたりにも、この革命に対する、*英国地方人士の一種の見方が潜んでゐるのだ*、*といえざればいい*、*すきであらうか*。いな、*それよりも、十八世紀以降におけるハル市の急激な発展がもたらした、物心両面の変化は、永い歴史の、せいぜい一とこまにしかすぎぬこのエピソードに、いつまでもかかずら*、*わら*、*エモン・ユナルな過熱だけは、不賢明なこととしたのである*。さらには、*い*、*そう觀念させたところに、この国の特異な発展のパターンがあつたのだ*。この地方においても、*十八世紀以降の、研究文献目録が明示するであらうように、現実目の前にあるトロー*、*ル船が、鉄道が、かれらにはより切実であつたのである*。そして、*今世紀、英国もまた闊しつある、社会革命のなかにあつても、この*

大人の国民は、遠い十七世紀の根堀り人 Wurzelforscher であるおきに、まず常識的な実際人として現われたのであろう。うす高い革命史料の山のなかで、筆者に去来したひとつの感想であつた。

とついで、ハル市を中心とする、革命史研究文献のうち、古くは E. Broxap, *The Sieges of Hull during the Great Civil War* (E. H. R., xx, 1905) があるが、ここでは地方史料の利用は、ほとんどまだ十分に行われてない。この史料利用面からいへば、ローカ・マンであり、まじたくのマイチキブ史家にしかすぎないが、B. N. Reckitt, *Charles I and Hull, 1652* の方が、数等秀れているのである。だが、その叙述面においては、トリー的なマイチキブリズムが、読者の鼻につくところであろう。研究書としては、貧困などの二論著しかあげえない現状であるが、筆者は、これをカンバーするものとして、前掲稿でもすでにあげた Marie Hall の「キキメ」ンター小説 *Andrew Marvell and his Friends, A Story of Sieges of Hull* (Christian World, June 1873-Sep. 1874, 9 ed. 1910) を推すにやぶさかでない。清新の感なくはない、彼女のヴィクトリア期ビュエリタニズムは問わないまでも、地方における革命の具体的過程について、それは、はるかに教えるところが多い。それでは、次の問題として、革命史については、どうふう史料があるものであろうか。まず、革命時のハルの総督 Sir John Hotham の Hotham

MSS. については、すでに前稿ペヴァリー古文書館叙述のくだりにおいてふれた。俗に *Bench Book* と称せられる、テューダー以来の市文書の一部は、これも前者と同様、ギルド・ホールに収蔵されたまま、また陽の目をみない段階である。この文書こそ、実は革命下市当局の動きを、細密に告げてくれるものであるが、もつと、市文書のリストにのつては、L. M. Stannwell, *Calendar of the Ancient Deeds, Letters, Miscellaneous Old Documents etc. in the Archives of the Corporation, 1951*。同時に、ほほ同時代史料として重視すべきものに、大英博物館所蔵未公開の Abraham de la Pryme, *The History, Antiquities and Description of the Town and County of Kingston upon Hull* (Warburton Collection, Lansdown MSS., no. 890) があるが、そのノビーは、市立図書館に備えられてゐる。そして、実はこの市立図書館こそ、革命史料、とくにマンフレット類の索引源なのである。館員が幾抱えか運んでくれる山なす史料群は、真実を告白すれば、勇気の源泉であるよりも、落胆のそれであることが多い。この研究にはおそらく何年かの努力が必要なのであろう。決して綱羅でざるわけではないが、適当にビツク・フツプしてみれば、次のようなものがある。The Humble Petition of the Lords and Commons to the King. For leave to remove the Magazine at Hull to

the Tower of London, 9 Apr., 1642; The Humble Petition of the Gentry and Commons of York, 22 Apr., 1642; The Declaration and Votes of Both Houses of Parliament concerning the Magazine at Hull and Sir John Hotham, Governour thereof, and His Majesties answer therunto, 28 Apr. and 4 May, 1642; A Declaration of the Lords and Commons in answer to the King's Declaration concerning Hull, 26 May, 1642; Resolved upon the Question or a Question resolved concerning the Right which the King hath to Hull etc.? May, 1642; A Learned Speech made by the Right Worshipfull Sir John Hotham 26 May, 1642; A Declaration of the Lords and Commons for the preservation and safety of the Kingdom and the Town of Hull, 13 July, 1642; The Supplication of the Maior, Aldermen, Merchants, Mariners, Souldiers and Townsmen of Kingston upon Hull, in the behalfe of themselves and Sir John Hotham unto His Majesty. Humbly declaring their hearty desire for Peace and their unwillingness for War. Presented to His Majesty at Beverley 15 July 1642; Sad and Fearfull News from Beverley, 26 July, 1642; A Happy Discovery of the Strange & Fearfull Plots layed by our Cavaliers for invading Hull, 6 Aug., 1642;

A True Relation of the Taking of the City of York by Sir John Hotham for the King and Parliament, Sep., 16; True News from Hull, Being a perfect relation of a conspiracy By divers Cavaliers coming in disguised Habits, and entering themselves as Souldiers who intended to have surpris'd the Town and have killed Sir John Hotham, 16 Apr., 1643 卷々° 44 卷° 11 卷 12 卷 13 卷 14 卷 15 卷 16 卷 17 卷 18 卷 19 卷 20 卷 21 卷 22 卷 23 卷 24 卷 25 卷 26 卷 27 卷 28 卷 29 卷 30 卷 31 卷 32 卷 33 卷 34 卷 35 卷 36 卷 37 卷 38 卷 39 卷 40 卷 41 卷 42 卷 43 卷 44 卷 45 卷 46 卷 47 卷 48 卷 49 卷 50 卷 51 卷 52 卷 53 卷 54 卷 55 卷 56 卷 57 卷 58 卷 59 卷 60 卷 61 卷 62 卷 63 卷 64 卷 65 卷 66 卷 67 卷 68 卷 69 卷 70 卷 71 卷 72 卷 73 卷 74 卷 75 卷 76 卷 77 卷 78 卷 79 卷 80 卷 81 卷 82 卷 83 卷 84 卷 85 卷 86 卷 87 卷 88 卷 89 卷 90 卷 91 卷 92 卷 93 卷 94 卷 95 卷 96 卷 97 卷 98 卷 99 卷 100 卷 101 卷 102 卷 103 卷 104 卷 105 卷 106 卷 107 卷 108 卷 109 卷 110 卷 111 卷 112 卷 113 卷 114 卷 115 卷 116 卷 117 卷 118 卷 119 卷 120 卷 121 卷 122 卷 123 卷 124 卷 125 卷 126 卷 127 卷 128 卷 129 卷 130 卷 131 卷 132 卷 133 卷 134 卷 135 卷 136 卷 137 卷 138 卷 139 卷 140 卷 141 卷 142 卷 143 卷 144 卷 145 卷 146 卷 147 卷 148 卷 149 卷 150 卷 151 卷 152 卷 153 卷 154 卷 155 卷 156 卷 157 卷 158 卷 159 卷 160 卷 161 卷 162 卷 163 卷 164 卷 165 卷 166 卷 167 卷 168 卷 169 卷 170 卷 171 卷 172 卷 173 卷 174 卷 175 卷 176 卷 177 卷 178 卷 179 卷 180 卷 181 卷 182 卷 183 卷 184 卷 185 卷 186 卷 187 卷 188 卷 189 卷 190 卷 191 卷 192 卷 193 卷 194 卷 195 卷 196 卷 197 卷 198 卷 199 卷 200 卷 201 卷 202 卷 203 卷 204 卷 205 卷 206 卷 207 卷 208 卷 209 卷 210 卷 211 卷 212 卷 213 卷 214 卷 215 卷 216 卷 217 卷 218 卷 219 卷 220 卷 221 卷 222 卷 223 卷 224 卷 225 卷 226 卷 227 卷 228 卷 229 卷 230 卷 231 卷 232 卷 233 卷 234 卷 235 卷 236 卷 237 卷 238 卷 239 卷 240 卷 241 卷 242 卷 243 卷 244 卷 245 卷 246 卷 247 卷 248 卷 249 卷 250 卷 251 卷 252 卷 253 卷 254 卷 255 卷 256 卷 257 卷 258 卷 259 卷 260 卷 261 卷 262 卷 263 卷 264 卷 265 卷 266 卷 267 卷 268 卷 269 卷 270 卷 271 卷 272 卷 273 卷 274 卷 275 卷 276 卷 277 卷 278 卷 279 卷 280 卷 281 卷 282 卷 283 卷 284 卷 285 卷 286 卷 287 卷 288 卷 289 卷 290 卷 291 卷 292 卷 293 卷 294 卷 295 卷 296 卷 297 卷 298 卷 299 卷 300 卷 301 卷 302 卷 303 卷 304 卷 305 卷 306 卷 307 卷 308 卷 309 卷 310 卷 311 卷 312 卷 313 卷 314 卷 315 卷 316 卷 317 卷 318 卷 319 卷 320 卷 321 卷 322 卷 323 卷 324 卷 325 卷 326 卷 327 卷 328 卷 329 卷 330 卷 331 卷 332 卷 333 卷 334 卷 335 卷 336 卷 337 卷 338 卷 339 卷 340 卷 341 卷 342 卷 343 卷 344 卷 345 卷 346 卷 347 卷 348 卷 349 卷 350 卷 351 卷 352 卷 353 卷 354 卷 355 卷 356 卷 357 卷 358 卷 359 卷 360 卷 361 卷 362 卷 363 卷 364 卷 365 卷 366 卷 367 卷 368 卷 369 卷 370 卷 371 卷 372 卷 373 卷 374 卷 375 卷 376 卷 377 卷 378 卷 379 卷 380 卷 381 卷 382 卷 383 卷 384 卷 385 卷 386 卷 387 卷 388 卷 389 卷 390 卷 391 卷 392 卷 393 卷 394 卷 395 卷 396 卷 397 卷 398 卷 399 卷 400 卷 401 卷 402 卷 403 卷 404 卷 405 卷 406 卷 407 卷 408 卷 409 卷 410 卷 411 卷 412 卷 413 卷 414 卷 415 卷 416 卷 417 卷 418 卷 419 卷 420 卷 421 卷 422 卷 423 卷 424 卷 425 卷 426 卷 427 卷 428 卷 429 卷 430 卷 431 卷 432 卷 433 卷 434 卷 435 卷 436 卷 437 卷 438 卷 439 卷 440 卷 441 卷 442 卷 443 卷 444 卷 445 卷 446 卷 447 卷 448 卷 449 卷 450 卷 451 卷 452 卷 453 卷 454 卷 455 卷 456 卷 457 卷 458 卷 459 卷 460 卷 461 卷 462 卷 463 卷 464 卷 465 卷 466 卷 467 卷 468 卷 469 卷 470 卷 471 卷 472 卷 473 卷 474 卷 475 卷 476 卷 477 卷 478 卷 479 卷 480 卷 481 卷 482 卷 483 卷 484 卷 485 卷 486 卷 487 卷 488 卷 489 卷 490 卷 491 卷 492 卷 493 卷 494 卷 495 卷 496 卷 497 卷 498 卷 499 卷 500 卷 501 卷 502 卷 503 卷 504 卷 505 卷 506 卷 507 卷 508 卷 509 卷 510 卷 511 卷 512 卷 513 卷 514 卷 515 卷 516 卷 517 卷 518 卷 519 卷 520 卷 521 卷 522 卷 523 卷 524 卷 525 卷 526 卷 527 卷 528 卷 529 卷 530 卷 531 卷 532 卷 533 卷 534 卷 535 卷 536 卷 537 卷 538 卷 539 卷 540 卷 541 卷 542 卷 543 卷 544 卷 545 卷 546 卷 547 卷 548 卷 549 卷 550 卷 551 卷 552 卷 553 卷 554 卷 555 卷 556 卷 557 卷 558 卷 559 卷 560 卷 561 卷 562 卷 563 卷 564 卷 565 卷 566 卷 567 卷 568 卷 569 卷 570 卷 571 卷 572 卷 573 卷 574 卷 575 卷 576 卷 577 卷 578 卷 579 卷 580 卷 581 卷 582 卷 583 卷 584 卷 585 卷 586 卷 587 卷 588 卷 589 卷 590 卷 591 卷 592 卷 593 卷 594 卷 595 卷 596 卷 597 卷 598 卷 599 卷 600 卷 601 卷 602 卷 603 卷 604 卷 605 卷 606 卷 607 卷 608 卷 609 卷 610 卷 611 卷 612 卷 613 卷 614 卷 615 卷 616 卷 617 卷 618 卷 619 卷 620 卷 621 卷 622 卷 623 卷 624 卷 625 卷 626 卷 627 卷 628 卷 629 卷 630 卷 631 卷 632 卷 633 卷 634 卷 635 卷 636 卷 637 卷 638 卷 639 卷 640 卷 641 卷 642 卷 643 卷 644 卷 645 卷 646 卷 647 卷 648 卷 649 卷 650 卷 651 卷 652 卷 653 卷 654 卷 655 卷 656 卷 657 卷 658 卷 659 卷 660 卷 661 卷 662 卷 663 卷 664 卷 665 卷 666 卷 667 卷 668 卷 669 卷 670 卷 671 卷 672 卷 673 卷 674 卷 675 卷 676 卷 677 卷 678 卷 679 卷 680 卷 681 卷 682 卷 683 卷 684 卷 685 卷 686 卷 687 卷 688 卷 689 卷 690 卷 691 卷 692 卷 693 卷 694 卷 695 卷 696 卷 697 卷 698 卷 699 卷 700 卷 701 卷 702 卷 703 卷 704 卷 705 卷 706 卷 707 卷 708 卷 709 卷 710 卷 711 卷 712 卷 713 卷 714 卷 715 卷 716 卷 717 卷 718 卷 719 卷 720 卷 721 卷 722 卷 723 卷 724 卷 725 卷 726 卷 727 卷 728 卷 729 卷 730 卷 731 卷 732 卷 733 卷 734 卷 735 卷 736 卷 737 卷 738 卷 739 卷 740 卷 741 卷 742 卷 743 卷 744 卷 745 卷 746 卷 747 卷 748 卷 749 卷 750 卷 751 卷 752 卷 753 卷 754 卷 755 卷 756 卷 757 卷 758 卷 759 卷 760 卷 761 卷 762 卷 763 卷 764 卷 765 卷 766 卷 767 卷 768 卷 769 卷 770 卷 771 卷 772 卷 773 卷 774 卷 775 卷 776 卷 777 卷 778 卷 779 卷 780 卷 781 卷 782 卷 783 卷 784 卷 785 卷 786 卷 787 卷 788 卷 789 卷 790 卷 791 卷 792 卷 793 卷 794 卷 795 卷 796 卷 797 卷 798 卷 799 卷 800 卷 801 卷 802 卷 803 卷 804 卷 805 卷 806 卷 807 卷 808 卷 809 卷 810 卷 811 卷 812 卷 813 卷 814 卷 815 卷 816 卷 817 卷 818 卷 819 卷 820 卷 821 卷 822 卷 823 卷 824 卷 825 卷 826 卷 827 卷 828 卷 829 卷 830 卷 831 卷 832 卷 833 卷 834 卷 835 卷 836 卷 837 卷 838 卷 839 卷 840 卷 841 卷 842 卷 843 卷 844 卷 845 卷 846 卷 847 卷 848 卷 849 卷 850 卷 851 卷 852 卷 853 卷 854 卷 855 卷 856 卷 857 卷 858 卷 859 卷 860 卷 861 卷 862 卷 863 卷 864 卷 865 卷 866 卷 867 卷 868 卷 869 卷 870 卷 871 卷 872 卷 873 卷 874 卷 875 卷 876 卷 877 卷 878 卷 879 卷 880 卷 881 卷 882 卷 883 卷 884 卷 885 卷 886 卷 887 卷 888 卷 889 卷 890 卷 891 卷 892 卷 893 卷 894 卷 895 卷 896 卷 897 卷 898 卷 899 卷 900 卷 901 卷 902 卷 903 卷 904 卷 905 卷 906 卷 907 卷 908 卷 909 卷 910 卷 911 卷 912 卷 913 卷 914 卷 915 卷 916 卷 917 卷 918 卷 919 卷 920 卷 921 卷 922 卷 923 卷 924 卷 925 卷 926 卷 927 卷 928 卷 929 卷 930 卷 931 卷 932 卷 933 卷 934 卷 935 卷 936 卷 937 卷 938 卷 939 卷 940 卷 941 卷 942 卷 943 卷 944 卷 945 卷 946 卷 947 卷 948 卷 949 卷 950 卷 951 卷 952 卷 953 卷 954 卷 955 卷 956 卷 957 卷 958 卷 959 卷 960 卷 961 卷 962 卷 963 卷 964 卷 965 卷 966 卷 967 卷 968 卷 969 卷 970 卷 971 卷 972 卷 973 卷 974 卷 975 卷 976 卷 977 卷 978 卷 979 卷 980 卷 981 卷 982 卷 983 卷 984 卷 985 卷 986 卷 987 卷 988 卷 989 卷 990 卷 991 卷 992 卷 993 卷 994 卷 995 卷 996 卷 997 卷 998 卷 999 卷 1000

ham), *Stapletons* (Walter Priory), R Eures (Maton) (ヤタリ
ツタは議會派、*印は愛党) など、約三〇の地方家族が具体的に動
いたことが確かめられるが、党派形成の決定的契機については、
マッリー・スピーナーなどの史料にすべて恵まれているわけではな
く、把握に困難を極める。前述の Hotham MSS. をはじめ、Holme
MSS., Bethell MSS., Boynton MSS., Legend MSS., Constable
MSS. など、これと市文書などを組み合わせて、よく求めてゆへか、
またなかなか入手困難な、後述するところ(本稿後節参照)、家
族史ないし伝記類をどう利用してゆへか、興味ある研究はまだまだ
将来の手をまつてゐる、ところではある。なお、これら家族の、
簡単な消長を摘記したものとすれば、この論作があることを付記
した。J. W. Clay, *The Gentry of Yorkshire at the Time of
the Civil War* (Y. A. J. xxiii)。また、地方史学会発行の *York-
shire Composition Papers* (Y. A. S., Rec. Ser., xv, xviii, xx);
Yorkshire Fines for the Stuart Period (ibid., liii, lviii); J. C.
Cox, *Parliamentary Survey of the Benefices of the East Riding*
(T. T. E. R. A. S., ii, iv) などが革命史料としてはよく重要であ
る。

革命期に高揚をみせるピューリタンニズムについては、政治・社会
史研究にひきかえ、地方は二つの未公開重要論文に恵まれている。

J. A. Newton, *Puritanism in the Diocese of York, 1603-1640*
(*London Ph. D.*, 1955); H. I. Duntton, *Religion and Society in
East Yorkshire, 1600-1640* (Hull M. A.) がそれぞれ、ふたつ前者
は、このニューマリー両市について告げるところが多い。なお、
B. Dale, *Yorkshire Puritanism and Early Nonconformity*.
Illustrated by the Lives of the Ejected Ministers, 1902; J. G.
Miall, *Congregationalism in Yorkshire, 1868* が、それぞれ地方
の宗教事情を明らかにする。また、このような問題と直接関係をも
つ教育面の研究については、とくにその面での著作の多い A. F.
Leach が述べたものでもあるが、これについては、とよみぎ V.
C. H. Yorks, vol. i を挙げておかならぬ。

十六・十七世紀の地方史研究で、Quarter Session Records が重
要ではあるとは、いうまでもない。ところが、ヨークシプでも他
の二つのライオンズとて同じくは公開されてくるかわらぬ、こ
れはまたそれが未公開なのである。そして、これもまた、ニューマ
リー市文書館について見なければならぬ。よく忘れたが、最後に、
こうしたローカルのレコードととも、チャーター・ステートメント
史の地方史研究について、*Letters and Papers of Henry VIII.*;

State Papers Domestic; *Patent Rolls* (Ed. VI, Eliz., Mary);
Acts of the Privy Council など、ニューマリー・レコードが、これ

また必要であることいふまでもなからう。なお、テューダー史にならぬ、スチュアート史に関する Y. A. S., Rec. Ser. の関連ナンバ―をあげておけば、その上とあとのつぎの通り。nos. i, ii, iv, ix, xv, xviii, xx, xxvi, xxviii, xxxii, xxxv, xxxviii, xl, xliii, xlvi, liii, lviii, lx, xviii, lxxxiii, civ-v.

① なお、教授には、E. H. R., ix; Y. A. J., xxxvii; xxxaiii にも関連論文があつたが、たしかめえなかつた。

② 一般に、社会経済文献については、第五節ハル、ペウァリー市文書紹介の項を参考せられたい。

(未完)

A Note on the Study in English Local History (1)

by
Takeomi Ochi

A forigner's attempt to treat of Western history meets insuperable difficulties at every turn. He may be unable to access the documents and literatures or else understand the evidences. He may moreover be a mere stranger to the necessary publications of a given theme. Now the local and regional studies of history are keenly pursued in this country and abroad and it is not unnatural that some of the students are eager to approach the subject even of the Western nations. Their incitement comes from the scientific directions recently assumed by historical studies and their intentions must be justified. But intentions are one thing and historical studies another. We cannot deny the difficult situation in which our foreign studies stand.

Necessary steps, therefore, must be taken beforehand and one of them will be to inform the students of how the local history studies have been carried on in foreign countries and are being run with regard to the social and academic background of those nations. This paper is an attempt to report of the regional studies of England which are now being assumed by the University of Hull, East Ring of Yorkshire, where I had the privilege of staying for a past year. Mostly relying on Professor A. G. Dickens' bibliography but inserting my views and the documents from such repositories as of the Record Office and other libraries, I hope to describe one of the recent currents of English historiography and also hope it to be of some use to the students who are reading English history in this country. My thanks are due to all the people who helped me to initiate into this study.